

1 文(文章)で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。
b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されています。

c ある要素に加点するかが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点(独立採点)すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d 解答通りという条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

a 答案中に大きな誤読と判定される内容(語句)などがある場合は、その内容(語句)を減点要素として示されている場合もあります。

b 加点要素でも減点要素でもない部分もあります。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、一箇所につき1点の減点要素とします。

a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

*字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「…とはどういうことか?」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

*ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。

また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたものの。

d 答案の文章が最後まで完結していないもの。

4 古文あるいは漢文の訳を記述する設問の場合も以上に準じますが、文末の句点や文末の処理あるいは答案の完結にこだわらなくともよい場合はその都度明記されています。

Ⅰ 現代文（評論）採点基準（合計40点）

問一（各2点） (1) 虐殺 (2) 衰退 (3) 受粉 (4) 介在 (5) 飛躍

問二 12点

（模範解答例）

A ○1点

人間は、自分たちには特別な地位があると考えたとき、

B ①○1点

まず生き物と人間の「いのち」に、さらに人間の「いのち」の中にも、高級と低級の格差

B ②○1点

を設け、最終的に自己の「いのち」を最も高級な、絶対的で、内部にしかないものと

V 〈分析〓分けること〉○1点

したため、

B ③○1点

W 〈総合〓まとめること〉○1点

「いのち」のありかを不明なものし、

C ①○1点

C ②○1点

他方で「いのち」がつながりの中にあるのを否定することになり、関係の場を失ったた

X 〈分析〓分けること〉○1点

めに、

C ③○1点

「いのち」のありかを最終的に不明なものにしてしまったこと。

Y 〈総合〓まとめること〉○1点 Z 〈分析〓分けること〉○1点 (12点)

【構造点】

・Vは、前提条件Aに関して、傍線部の「理由」の一方を説明する条件Bの内部で、B①とB②の〈矛盾〉しない二要素に〈分析〓分けること〉として説明する構造への評価である。

ここでは、B①とB②がそろっていればこの構造が成立しているとして1点加算。

V 〈分析〓分けること〉 B①+B② ○1点

・Wは、条件Bの内部で、B①とB②を、B③に〈総合〓まとめること〉する構造への評価である。ここでは、B①、B②、B③がそろっていればこの構造が成立しているとして

1点加
点。

W 〈総合Ⅱまとめること〉 B①+B②+B③ 〇1点

・Xは、前提条件Aに関して、傍線部の「理由」の他方を説明する条件Cの内部で、C①とC②の〈矛盾〉しない〈因果関係〉の二要素に〈分析Ⅱ分けること〉して説明する構造への評価である。ここでは、C①とC②がそろっていればこの構造が成立しているとして1点加
点。

V 〈分析Ⅱ分けること〉 C①+C② 〇1点

・Yは、条件Cの内部で、C①とC②を、C③に〈総合Ⅱまとめること〉する構造への評価である。ここでは、C①、C②、C③がそろっていればこの構造が成立しているとして1点加
点。

Y 〈総合Ⅱまとめること〉 C①+C②+C③ 〇1点

・Zは、前提条件Aに基づいて、傍線部の「理由」を、傍線部B、Cの〈矛盾〉しない二条件に〈分析Ⅱ分けること〉して説明する構造への評価である。ここでは、条件Aと、条件B、C内の要素がそれぞれ一つ以上あれば、この構造の骨組みは成立しているとして1点加
点。

Z 〈分析Ⅱ分けること〉 A+Bの要素+Cの要素 〇1点

◎ 採点のポイント

※ A、B、Cは条件同士で、また条件B、C内では要素同士でも、原則的に部分採点可能。(7点満点)

※ ただし、【構造点】V・W・X・Y・Zは、右に示した、条件と要素を組み合わせた意味内容が成立している場合にのみ加
点する。(5点満点)

A 「人間は、自分たちには特別な地位があると考えたとき、」(1点)

※ 傍線部の「理由」を説明するための前提条件。

○ 「人間が、自分たちを特別な地位に押し上げた時、」「人間が自らを他の生物とは異なる地位に置いた時、」などでも可。

× 「人間」「自分たちを特別な地位に置く」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

B 「まず生き物と人間の「いのち」に、さらに人間の「いのち」の中にも、高級と低級

の格差を設け、最終的に自己の「いのち」を最も高級な、絶対的で、内部にしかないものとしたため、「いのち」のありかを不明なものにし、「」(3点)

※ Aに関して、傍線部の「理由」の一方を説明する条件。

① 「まず生き物と人間の『いのち』に、さらに人間の『いのち』の中にも、高級と低級の格差を設け、」の要素に1点。

※ B内部を二段階に〈分ける〉一方の要素。

○ 「第一に生き物と人間の『いのち』に、次いで人間間のそれに、高級、低級の格差を導入し、「まず生き物と人間の間、次に人間同士の間、高級と低級の『いのち』の差別を設け、」などでも可。

× 「生き物と人間の『いのち』」「人間の『いのち』」「高級と低級の格差」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

② 「最終的に自己の「いのち」を最も高級な、絶対的で、内部にしかないものとしたため、」の要素に1点。

※ B内部を二段階に分ける他方の要素。

○ 「究極的には自己の『いのち』を内部にある、最も高級なものとして絶対視したために、「最後に、自分の『いのち』を、最高級の、絶対的で、内部的なものとしたために、」などでも可。

× 「最終的」「自己の『いのち』」「最も高級、絶対的、内部的」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

③ 『いのち』のありかを不明なものにし、「」の要素に1点。

※ B①、B②をまとめる要素。

○ 『いのち』のあり場所を分からないものにし、「『いのち』ある場所を見えなくし、」などでも可。

× 『いのち』のありか「不明」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

C 「他方で『いのち』がつながりの中にあるのを否定することになり、関係の場を失ったために、『いのち』のありかを最終的に不明なものにしてしまったこと。」(3点)

※ Aに関して、傍線部の「理由」の他方を説明する条件。

① 「他方で『いのち』がつながりの中にあるのを否定することになり、「」の要素に1点。

※ C内部を〈因果関係〉に分ける〈因〉の要素。

○ 「他方で『いのち』のつながりを否定することになって、「一方で『いのち』がつながりに中に存在するのを否定することになり、「」などでも可。

× 『いのち』がつながりの中にあることの否定「のニュアンスがなければ×0点

② 「関係の場を失ったために、「」の要素に1点。

※ C内部を〈因果関係〉に分ける〈果〉の要素。

- 「関係で作られる場を失ったので」、「関係の場を見失ったために」、「などでも可。
 - × 「関係の場」「失う」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。
- ③ 『いのち』のありかを最終的に不明なものにしてしまったこと。』の要素に1点。
- ※ C①、C②をまとめる要素。
 - 『いのち』のある場を究極的に見失ってしまったこと。』いのち』がどこにあるのかをもちや見出すことができなくなったこと。』などでも可。
 - × 『いのち』のありか』最終的に不明』の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

(模範解答例)

A ○1点

すべての生き物も無生物も成仏できるという「いのち」の平等観であるが、

B ①○1点

B ②○1点

これを空間的にのみ捉えて、草を虫や動物が食べ、その虫や動物を食べる生き物がいる

W (分析||分けること) ○1点

というように平等を壊してしまうのではなく、

C ①○1点

C ②○1点

草を食べる蝶が花の受粉を助け、またすべての生き物たちが最後には土に帰って他の生

X (分析||分けること) ○1点

き物たちの生活基盤となるように、

C ③○1点

時間を介在させて、すべては平等に成仏できるのだとする時空的な認識。

Y (総合||まとめること) ○1点 Z (分析||分けること) ○1点 (10点)

【構造点】

・Wは、傍線部をややかみ砕いた条件Aを説明する一方の条件である、B内部の構造である。B ①と、B ②の否定の成分を覗いた部分に立ち上がる〈因果関係〉の二要素に〈分析||分けること〉する構造への評価である。この場合もちろんB ①、B ②がそろっていないければならない。B ①、B ②がそろっていればこの構造が内包されて成立していると判断し1点加点。

W (分析||分けること) B ①+B ② ○1点

・Xは、傍線部をややかみ砕いた条件Aを説明する他方の条件である、C内部の構造である。C ①、C ②の〈矛盾〉しない二要素に〈分析||分けること〉する構造への評価である。C ①、C ②がそろっていれば、この構造が成立しているとして1点加点。

X (分析||分けること) C ①+C ② ○1点

・Yは、C ①、C ②を、C ③に〈総合||まとめること〉する構造への評価である。C ①、C ②、C ③がそろっていれば、この構造が成立しているとして1点加点。

Y (総合||まとめること) C ①+C ②+C ③ ○1点

・Zは、傍線部をややかみ砕いた条件Aを説明する、(not~but)にはめ込まれた〈矛盾〉しない二条件B、C—例えば〈男じゃないよ、女だよ〉のように〈not〉という否定の成

分が入ることで、P（男）とQ（女）に発生しうる〈矛盾〉が排除される。ちなみに〈notP〉 \parallel B、〈butQ〉 \parallel Cである—に〈分析 \parallel 分けること〉として説明する構造への評価である。この場合、条件Aがあり、条件B、Cの要素がそれぞれ一つ以上あれば、この構造の骨組みは成立しているとみなして1点加点。
Z〈分析 \parallel 分けること〉 A+Bの要素+Cの要素 ○1点

◎ 採点のポイント

※ A、B、Cは条件同士において、また条件B、C内では要素同士においても、原則的に部分採点可能。（6点満点）

※ ただし、【構造点】W・X・Y・Zは、右に示した、条件、要素を組み合わせた意味内容が成立している場合にのみ加点する。（4点満点）

A 「すべての生き物も無生物も成仏できるという『いのち』の平等観であるが、」（1点）

※ 傍線部をややかみ砕いた、説明のための前提条件。

○ 「生物、無生物に関わりなくすべては成仏できるという平等な『いのち』の見方だが、「生物、無生物のすべてがみな成仏できるという『いのち』の平等主義なのだが、」などでも可。

× 「すべての生き物、無生物」「成仏」「いのち』の平等観」の三成分のニュアンスがそろってなければ×0点。

B 「これを空間的にのみ捉えて、草を虫や動物が食べ、その虫や動物を食べる生き物がいるというように平等を壊してしまうのではなく、」（2点）

※ Aを説明する〈notP〉の条件。

① 「これを空間的にのみ捉えて、」の要素に1点。

※ Bに内包される〈因果関係〉の〈因〉の要素。

○ 「空間的な視点でのみ捉えて、」「空間的な側面にしか留意せず、」などでも可。

× 「空間的把握」「限定」の二成分のニュアンスがそろっていなければ×0点。

② 「草を虫や動物が食べ、その虫や動物を食べる生き物がいるというように平等を壊してしまうのではなく、」の要素に1点。

※ Bに内包される〈因果関係〉の〈果〉の要素（否定の成分を抜きで考える）。

○ 「草を食べる虫や動物を食べる生き物がいるというように、不平等を見るのではなく、」「草が虫や動物に食べられ、その虫や動物が他の生き物に食べられるというように、平等を破壊してしまうのではなく、」などでも可。

× 「草を食べる虫や動物」「それら（ \parallel 草を食べる虫や動物）を食べる生き物」「平

等の破壊」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

C 「草を食べる蝶が花の受粉を助け、またすべての生き物たちが最後には土に帰って他の生き物たちの生活基盤となるように、時間を介在させて、すべては平等に成仏できるのだとする時空的な認識。」(3点)

※ Aを説明する〈point〉の条件。

① 「草を食べる蝶が花の受粉を助け、」の要素に1点。

※ C内部を分ける一方の要素。

○ 「蝶が草を食べる一方で花の受粉を助け、」草を食べる蝶がやがて花の受粉を支え、」などでも可。

× 「草を食べる蝶」「花の受粉を助ける」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

② 「またすべての生き物たちが最後には土に帰って他の生き物たちの生活基盤となるように、」の要素に1点。

○ 「あるいは全生物が最終的には土に戻って他の生物の生活を支えるように、」また生き物全てが土に帰って他の生物の生活の土台となるように、」などでも可。

× 「全ての生き物」「土に帰る」「他の生物の生活基盤となる」の三成分ニュアンスのがそろっていないければ×0点。

③ 「時間を介在させて、すべては平等に成仏できるのでとする時空的な認識。」の要素に1点。

○ 「時間の介在によって成立する、平等に全て成仏できるのだという時空的認識。」

「時間の導入によって、全てのものが平等に成仏できるとする時空的な認識。」などでも可。

× 「時間の介在」「全ての平等な成仏」「時空的な認識」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

問四 8点

(模範解答例)

A ○1点

すべての命は尊いとか、生態系のなかですべてが役割を果しているという、「いのち」の

独立性によるのではなく、

B ① ○1点

一番奥に結び合って成立している「いのち」の世界があり、

B ② ○1点

個別性はそこから生じた「突起」にすぎず、

B ③ ○1点

生から死への飛躍がその個性を喪失させ、生き物を「いのち」の世界に回帰させること

X (分析) 分けること ○1点

になるが、

B ④ ○1点

その世界は神仏の世界だから、「いのち」はすべて成仏できることになるので。

Y (総合) まとめること ○1点 Z (分析) 分けること ○1点 (8点)

8

【構造点】

・ Xは、B内部で、B①から生起する「個別性」行方を、B②とB③の〈矛盾〉しない二要素に〈分析)分けること〉として説明する構造への評価である。B①、B②、B③がそろっていれば、この構造が成立しているとして1点加算。

X (分析) 分けること B ① + B ② + B ③ ○1点

・ Yは、B②、B③を、B④に〈総合)まとめること〉して結論づける構造への評価である。B②、B③、B④がそろっていれば、この構造が成立しているとして1点加算。

Y (総合) まとめること B ② + B ③ + B ④ ○1点

・ Zは、傍線部を〈notP ~ butQ〉の構文にはめ込まれた〈矛盾〉しない二条件A、B―〈notP) || A、〈notQ) || B―に〈分析)分けること〉として説明する構造への評価である。ここでは、条件Aと、条件B内の要素が一つ以上入ってあれば、この仕組みの骨組みが成立しているのみならず1点加算。

Z (分析) 分けること A + Bの要素 ○1点

◎ 採点のポイント

※ A、Bは条件同士、またB内では要素同士において、原則的に部分採点可能。(5点満点)

※ ただし、【構造点】X・Y・Zは、右に示した、条件と要素の組み合わせの意味内容が成立している場合にのみ加点する。(3点満点)

A 「すべての命は尊いとか、生態系のなかですべてが役割を果しているという」、「いのち」の独立性によるのではなく、」(2点)

※ 傍線部を説明するための〈not〉の条件。傍線部の外延を規定する内容。

○ 「どの命も尊いとか、生態系においてはあらゆる『いのち』が貴重な役割を演じているという、『いのち』の自立性によるのではなく、「命は全て尊く、生態系の中でもそれぞれ役割を果たしているというような、『いのち』の自律性によるのではなく、」などでも可。

× 「すべての命は尊い」「生態系ですべてが役割を果す」「『いのち』の独立性の否定」の三成分のニュアンスがそろっていないなければ×0点。

B 「一番奥に結び合って成立している『いのち』の世界があり、個性はそこから生じた『突起』にすぎず、生から死への飛躍がその個性を喪失させ、生き物を『いのち』の世界に回帰させることになるが、その世界は神仏の世界だから、『いのち』はすべて成仏できることになるので。」(4点)

※ 傍線部を説明するための〈but〉の条件。傍線部の説明の本体。

① 「一番奥に結び合って成立している『いのち』の世界があり、」の要素に1点。

※ B内部を説明するための前提的な要素。

○ 「もつとも奥に共有されている『いのち』世界が存在しており、「一番深いところにつながり合って成り立っている『いのち』の世界があつて、」などでも可。
× 「一番奥」「結び合って成立」「『いのち』の世界」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

② 「個性はそこから生じた『突起』にすぎず、」の要素に1点。

※ B①を説明する一方の要素。

○ 「個性はそこから伸びた突起のようなものにすぎず、「それぞれの『いのち』はそこから突き出たものにすぎず、」などでも可。

× 「個性」「そこ」(=『いのち』の世界)から生じた突起「の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

③ 「生から死への飛躍がその個性を喪失させ、生き物を『いのち』の世界に回帰さ

せることになるが、「」の要素に1点。

※ B①を説明する他方の要素。

○ 「個性は生から死への跳躍によって失われ、生き物はすべて『いのち』の世界に帰ることになるが、「生から死への移行によって、個性は消失し、すべての生物は『いのち』の世界に復帰することになるが、「などでも加。

× 「生から死への跳躍」「個性の喪失」「生物の『いのち』の世界への回帰」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

④ 「その世界は神仏の世界だから、『いのち』はすべて成仏できる」となるので。「」の要素に1点。

※ B②、B③をまとめて結論づける要素。

○ 「その世界が神仏の世界である以上、『いのち』は例外なく成仏できるから。「」それは神仏の世界であるから、どんな『いのち』でも成仏できることになるから。「」などでも加。

× 「その世界(＝『いのち』の世界)」「神仏の世界」「『いのち』はすべて成仏可能」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

問一 10点

（模範解答例）

A①〇1点
A②〇1点
A③〇1点
主人公と妻の会話を、他の会話とは違って、引用符を用いずに表現して
鈍重なもの

にし、

B①〇1点

B②〇1点

B③〇1点

向こうをむいたまま 返事をしないことも、
嫌悪感をむきだしにすることもある妻の様

X〈分析〓わけること〉〇1点

子とともに、

C①〇1点

C②〇1点

主人公と妻の日常生活の現実がすでに破綻していることを 暗示するという効果。

Y〈総合〓まとめること〉〇1点（10点）

【構造点】

・ Xは、傍線部の表現効果を、本体の条件Aと、補足的な条件Bの〈矛盾〉しない二条件に〈分析〓分けること〉して説明する構造への評価である。ここでは、条件A、B内の要素がそれぞれ一つ以上入っている点加算。

X〈逆説〓矛盾を含むこと〉 Aの要素+Bの要素 〇1点

・ Yは、条件Aと、補足的な条件Bを、条件Cに〈総合〓まとめること〉して結論づける構造への評価である。ここでは、条件A、B、C内の要素がそれぞれ一つ以上入っている点加算。

Y〈総合〓まとめること〉 Aの要素+Bの要素+Cの要素 〇1点

◎ 採点のポイント

※ A、B、Cは条件同士において、また各条件内で要素同士においても、原則的に部分採点可能。（8点満点）

※ ただし、【構造点】X・Yは、右に示した要素を組み合わせた意味内容が成立している場合にのみ加点する。(2点満点)

A 「主人公と妻の会話を、他の会話とは違って、引用符を用いずに表現して鈍重なものにし、」(3点)

※ 傍線部を説明するための核心となる条件。

① 「主人公と妻の会話を、」の要素に1点。

○ 「主人公夫婦の会話を、」主人公と妻のはずまない会話を、」などでも可。

× 「主人公と妻の会話」のニュアンスがなければ×0点。

② 「他の会話とは違って、引用符を用いずに表現して」の要素に1点。

○ 「引用符を使わないことで、他の会話と差別化して」「引用符を用いないことで、他の会話との違いを浮き立たせ」などでも可。

× 「他の会話との違い」「引用符の非使用」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

③ 「鈍重なものにし、」の要素に1点。

○ 「鈍重な感じを強め、」「コミュニケーションのなさを強調し、」などでも可。

× 「鈍重さ」のニュアンスがなければ×0点。

B 「向こうをむいたまま返事をしないことも、嫌悪感をむきだしにすることもある妻の様子とともに、」(3点)

※ 傍線部を説明するための補足的な条件。

① 「向こうをむいたまま」の要素に1点。

○ 「向こう向きのまま」「こちらを向くこともなく」などでも可。

× 「向こう向きのまま」のニュアンスがなければ×0点。

② 「返事をしないことも、」の要素に1点。

○ 「言葉を返さないことも、」「返答をしないことも」などでも可。

× 「返事をしない」のニュアンスがなければ×0点。

③ 「嫌悪感をむきだしにすることもある妻の様子とともに、」の要素に1点。

○ 「嫌悪に満ちた声を漏らすこともある妻の様態と共に」「嫌悪感を隠そうともしない妻の姿とともに」などでも可。

× 「嫌悪感をむきだし」「妻の様子」「二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

C 「主人公と妻の日常生活の現実がすでに破綻していることを暗示する」という効果。」(2点)

※ A、Bをまとめて結論づける条件。

- ① 「主人公と妻の日常生活の現実がすでに破綻していることを」の要素に1点。
- 「主人公と妻の現実の生活がすでに崩壊していることを」「主人公夫婦の日常がもはや壊れてしまっていることを」などでも可。
 - × 「主人公と妻の日常生活の現実」「破綻している」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。
- ② 「暗示するという効果。」の要素に1点。
- 「示唆するという効果。」「ほのめかすという効果。」などでも可。
 - × 「暗示」「効果」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

問一 9点

(模範解答例)

A①○1点

A②○1点

家庭での日常生活の破綻を象徴する 指先にくいこんだガラス片を取り除こうとした時、

B○1点

部下の女性が好意で針を貸してくれたと思っていたが、

C○1点

X〈逆説〓矛盾を含むこと〉○1点

彼女がその針を屑箱に捨てたのを見て、

D①○1点

D②○1点

現実には潜む他意のようなものを感じ、それが家庭の不和を強く思い起こさせたから。

Y〈分析〓分けること〉○1点 Z〈総合〓まとめること〉○1点 (9点)

【構造点】

・ Xは、傍線部の理由説明をするための前提条件Aを、〈矛盾〉する二条件B、Cに引き裂いて説明する、〈逆説〓矛盾を含むこと〉の構造への評価である。ここでは条件A内の要素が一つ以上と、条件B、Cそろっていれば、この構造の骨組みが成立しているとみなして1点加算。

X〈逆説〓矛盾を含むこと〉 Aの要素+B+C ○1点

・ Yは、条件D内で、D①、D②の〈因果関係〉の二要素に〈分析〓分けること〉して説明する構造への評価である。ここではD①とD②がそろっていれば、この構造が成立しているとして1点加算。

Y〈分析〓分けること〉 D①+D② ○1点

・ Zは、B、Cの内容をDに〈総合〓まとめること〉して結論づけてゆく構造への評価である。ここでは、条件B、Cと、条件D内の要素が一つ以上入っていれば、この構造の骨組みは成立しているとみなして1点加算。

Z〈総合〓まとめること〉 B+C+Dの要素 ○1点

◎ 採点のポイント

※ A、B、C、Dは条件同士において、また条件A、D内では要素同士においても、原則的に部分採点可能。(6点満点)

※ ただし、【構造点】X・Y・Zは、右に示した、条件と要素を組み合わせた意味内容が場合にのみ加点する。(3点満点)

A 「家庭での日常生活の破綻を象徴する指先にくい込んだガラス片を取り除こうとした時、」(2点)

※ 傍線部の理由説明をするための前提条件。

① 「家庭での日常生活の破綻を象徴する」の要素に1点。

○ 「家庭の日常生活の崩壊を表象する」「家庭生活が壊れていることを表徴である」などでも可。

× 「家庭での日常生活の破綻」「象徴」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

② 「指先にくい込んだガラス片を取り除こうとした時、」の要素に1点。

○ 「指先の肉に食い込んでいるガラスの細片を除去しようとした時、」「指先にはまり込んでいるガラス片を取り出そうとした時。」などでも可。

× 「指先にくい込んだガラス片」「取り除く」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

B 「部下の女性が好意で針を貸してくれたと思っていたが、」(1点)

※ Aを説明する一方の条件。

○ 「部下の女性が心配して針を貸してくれたと感じていたが、」「部下の女性社員が善意で針を取り出してくれたと思っていたが、」などでも可。

× 「部下の女性」「好意で針を貸す」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

C 「彼女がその針を屑箱に捨てたのを見て、」(1点)

※ Aを説明する、Bとは〈矛盾〉する他方の条件。

○ 「彼女が針を足下の屑籠に捨てるのを目撃して」「その針が彼女によって足下の屑籠に捨て去られるのをみて、」などでも可。

× 「彼女」「針を屑籠に捨てる」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

D 「現実には潜む他意のようなものを感じ、それが家庭の不和を強く思い起こさせたから。」(2点)

※ B、Cをまとめて結論づける条件。

① 「現実には潜む他意のようなものを感じ、」の要素に1点。

○ 「日常に潜在する嫌悪のようなものを感じ」「現実の建前に隠された本音のよう

なものを感じさせ、」などでも可。

× 「現実には潜む他意」「感じる」の二成分のニュアンスがそろっていないなければ×0点。

② 「それが家庭の不和を強く思い起こさせたから。」の要素に1点。

○ 「それが家庭の気まずさを想起させたから。」「それが家庭における妻の本音と響き合うように感じたから。」などでも可。

× 「それ（＝彼女の行為）」「家庭の不和を思い起こさせる」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

(模範解答例)

A ○1点

少女達は、

B ① ○1点

海岸で明るい気分で撮影を頼んだ男性が、シャッターを切れずに、黙って手を振り、カ

B ② ○1点

メラを返しながらしやがみ込んだので、

最初病気になったのかと不安だったが、

X 〈分析Ⅱ分けること〉 ○1点

C ① ○1点

C ② ○1点

それでも大丈夫だと手を振るのを見て、

何か理解しがたいことが起こっていると感じて

Y 〈分析Ⅱ分けること〉 ○1点 Z 〈逆説Ⅱ矛盾を含むこと〉 ○1点

しまったから。(8点)

【構造点】

・ Xは、条件B内部を、B ①、B ②の〈因果関係〉の二要素に〈分析Ⅱ分けること〉して説明する構造への評価である。ここではB ①、B ②がそろっていればこの構造が成立しているとして1点加算。

X 〈分析Ⅱ分けること〉 B ①+B ② ○1点

・ Yは、条件C内部を、C ①、C ②の〈因果関係〉の二要素に〈分析Ⅱ分けること〉して説明する構造への評価である。ここではC ①、C ②がそろっていればこの構造が成立しているとして1点加算。

Y 〈分析Ⅱ分けること〉 C ①+C ② ○1点

・ Zは、Aの心情を、BとCの〈矛盾〉する二条件引き裂いて説明する〈逆説Ⅱ矛盾を含むこと〉の構造への評価である。ここでは、条件Aと、条件B、Cの要素がそれぞれ一つ以上あれば、この構造の骨組みが成立しているとみなして1点加算。

Z 〈逆説Ⅱ矛盾を含むこと〉 A+Bの要素+Cの要素 ○1点

◎ 採点のポイント

※ A、B、Cは条件同士において、また条件B、C内では要素同士においても、原則的に部分採点可能。(5点満点)

※ ただし、【構造点】X・Y・Zは、右に示した、条件と要素を組み合わせた意味内容が成立している場合にのみ加点する。(3点満点)

A 「少女達は、」(1点)

※ 主体明示の条件。

○ 「大学生であろう少女達は、」二人の少女は、」などでも可。

× 「少女達」のニュアンスがなければ×0点。

B 「海岸で明るい気分で撮影を頼んだ男性が、シャツターを切れずに、黙って手を振り、カメラを返しながらしやがみ込んだので、最初病気になったのかと不安だったが、」(2点)

※ 傍線部の理由説明のために、Aの心情を説明する一方の条件。

① 「海岸で明るい気分で撮影を頼んだ男性が、シャツターを切れずに、黙って手を振り、カメラを返しながらしやがみ込んだので、」の要素に1点。

※ 条件B内部で〈因果関係〉を構成する〈因〉の要素。

○ 「海岸で陽気な気分で撮影を依頼した男性が、シャツターを切らずに、黙ったまましやがみこんで、カメラを返しながらしやがみ込んでいたので、」海岸で写真を撮ってもらおうと明るい気分で頼んだ男性が、シャツターを切れずに、黙ってうずくまり、カメラを返しながらしやがみこんで、」などでも可。

× 「明るい気分で撮影を頼んだ」「男性が、シャツターを切れずに、しやがみこむ」「カメラを返しながらしやがみこんで」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

② 「最初病気になったのかと不安だったが、」の要素に1点。

※ 条件B内部で〈因果関係〉を構成する〈果〉の要素。

○ 「頭痛でも起こしたのかと不安に思ったが、」どこか悪いところでもあるのかと不安だったが、」などでも可。

× 「病気」「不安(心配)」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

C 「それでも大丈夫だと手を振るのを見て、何か理解しがたいことが起こっていると感じてしまったから。」(2点)

※ 傍線部の理由説明のために、Aの心情を説明する、Bとは〈矛盾〉する他方の条件。

① 「それでも大丈夫だと手を振るのを見て、」の要素に1点。

○ 「もう一度大丈夫と手を振って見せたので、」大丈夫とそれでも手を振ってよくなるので、」などでも可。

× 「それでも大丈夫だと」「手を振る」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

② 「何か理解しがたいことが起こっていると感じてしまったから。」の要素に1点。

○ 「想像できない何かが起こっていると思ってしまったから。」「理解できない何かが起こっていると感じたから。」などでも可。

× 「何か理解しがたいこと」「感じた」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

問四 8点

(模範解答例)

A ○1点

自分の家の窓が何者かによる投石で壊され、

B ○1点

また自分が少女の部屋の窓に石を投げて壊したことで、

X 〈分析Ⅱ分けること〉 ○1点

C ○1点

日常生活が破綻してしまっていることを告知され、告知したように、

Y 〈総合Ⅱまとめること〉 ○1点

D ① ○1点

どこか遠くで同じように、日常生活の破綻が露わになることが続いているのだなど

D ② ○1点

Z 〈分析Ⅱ分けること〉 ○1点

深々と感じる心情。(8点)

【構造点】

・ Xは、傍線部の説明の半分を、AとBの〈矛盾〉しない二条件に〈分析Ⅱ分けること〉して述べる構造への評価である。ここでは、条件A、Bがそろっていれば、この構造が成立しているとして1点加算。

X 〈分析Ⅱ分けること〉 A+B ○1点

・ Yは、条件A、BをCに〈総合Ⅱまとめること〉する仕組みへの評価である。ここでは、条件A、B、Cがそろっていれば、この構造が成立しているとして1点加算。

Y 〈総合Ⅱまとめること〉 A+B+C ○1点

・ Zは、傍線部を、〈A+B+C〉と、条件Dの〈矛盾〉しない二条件に〈分析Ⅱ分けること〉して説明する構造への評価である。ここでは、条件〈A、B、C〉の少なくとも一つの条件があり、また条件Dの要素が少なくとも一つあれば、この構造の骨組みが成立しているとみなして1点加算。

X 〈分析Ⅱ分けること〉 〈A、B、C〉の内の少なくとも一つ+Dの要素 ○1点

◎ 採点のポイント

※ A、B、C、Dは条件同士において、また条件D内では要素同士において、部分採点可能。(5点満点)

※ ただし、【構造点】X・Y・Zは、右に示した、条件・要素を組み合わせた意味内容が成立している場合にのみ加点する。(3点満点)

A 「自分の家の窓が何者かによる投石で壊され、」(1点)

※ 傍線部の説明の半分を、さらに半分に分けた一方の条件(⊖近景)。

○ 「誰かの投石によって自分の家の窓が壊され、」「自分の家の窓が不審者の投石によって破壊され、」などでも可。

× 「自分の家の窓」「何者かの投石による破壊」の二成分のニュアンスがそろっていなければ×0点。

B 「また自分が少女の部屋の窓に石を投げて壊し、」(1点)

※ 傍線部の説明の半分を、さらに半分に分けた他方の条件。

○ 「他方で少女の部屋の窓を自分が石を投げて壊し、」「また、少女の部屋の窓を自分の投石によって壊し、」などでも可。

× 「自分の投石」「少女の部屋の窓の破壊」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

C 「日常生活が破綻してしまっていることを告知され、告知したように、」(1点)

※ A、Bをまとめて結論づける条件。

○ 「日常生活の破綻が露わにされ、露わにしたように、」「現実生活が実は破綻していることが露呈してしまったように、」「などでも可。

× 「日常生活の破綻」「告知(⊖露呈)」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

D 「どこか遠くで同じように、日常生活の破綻が露わになることが続いているのだなど深々と感じる心情。」(2点)

※ 傍線部の説明のうち半分の場合(⊖遠景)。

① 「どこか遠くで同じように、日常生活の破綻が露わになることが続いているのだなど」との要素に1点。

○ 「どこか遠くでも、日常生活の破綻が露呈し続けているのだなど」「遠くでも同じように、現実生活の綻びが露わになりつつあるのだなど」などでも可。

× 「遠く」「日常生活の破綻の露呈」「続いている」の三成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

② 「深々と感じる心情。」の要素に1点。

○ 「重々しく感じる心情。」「しみじみと感じるという心情。」「などでも可。

× 「深々と感じる」「心情」の二成分のニュアンスがそろっていないければ×0点。

目 (古文『十訓抄』) 採点基準 [採点例 モニター得点順] ※ 40点満点

問一 (1) 二重傍線部の動作主(主語)を(ア) (イ) (オ) から選び、記号で答えなさい。

[正解] (ア) 【2点】 ※完答。

※記号で答えていない場合は×。

問一 (2) 二重傍線部の動作主(主語)を(ア) (イ) (オ) から選び、記号で答えなさい。

[正解] (イ) 【2点】

※完答。記号で答えていない場合は×。

問一 (3) 二重傍線部の動作主(主語)を(ア) (イ) (オ) から選び、記号で答えなさい。

[正解] (エ) 【2点】

※完答。記号で答えていない場合は×。

問二 (a) 傍線部を現代語訳しなさい。ただし、「この歌」「まこと」の内容がわかるように訳すこと。 【5点】

「該当傍線部」 A1玉淵は詩歌にたくみなりし者なり、B1その女ならばC1この歌を詠むべし、D1さらばE1まことと思し召すべき

「模範解答」 A1玉淵は詩歌が上手な者であった、B1玉淵の娘であるならC1「とりかひ」を題にして歌を詠め、D1上手に詠めたらE1玉淵の本当の娘と認めよう

「ポイント」

A【1点】玉淵は詩歌にたくみなりし者なり、 ↓ 玉淵は詩歌が上手な者であった、

※「詩歌」は「漢詩や和歌」でもよい。

※「上手な」は「上手い・精通していた」などでもよい。

※「であった」は「である・であり・であったから」などでもよい。

B【1点】その女ならば ↓ 玉淵の娘であるなら

※「玉淵」が明らかになっていない「その娘であるなら」などは×。

※「娘」は「女・妻」などでは×。

C【1点】この歌を詠むべし、 ↓ 「とりかひ」を題にして歌を詠め、

※『とりかひ』の歌を詠め「の意があればよい。

※「歌」がない「とりかひを詠め」は×。

※「とりかひ」はかぎ括弧で囲っていてもよいとする。

※「べし」は命令で訳してはならない。

D【1点】さらば ↓ 上手に詠めたら

※「そうすれば・そうしたら」などでもよいとする。

E【1点】まことと思し召すべき ↓ 玉淵の本当の娘と認めよう

※「本当の」はなくてもよい。

※「認めよう」は「思おう」などでもよい。また、「認めてもよい・思ってもよい」などでもよい。

※「へき」は意志（～しよう）、もしくはは適当（～よい）を訳されていなければならぬ。

※「玉淵の娘」という内容がない「本当だと認めよう」などは×。

※「思し召す」は尊敬語だが、ここは自敬表現なので尊敬表現として訳されていなくてもよい。（尊敬語で訳してもよいが、尊敬語で訳すと、「へき」の命令・適当の訳と組み合わせら

れないので、結果不正解となる)

問二 (b) 傍線部を現代語訳しなさい。ただし、動作の対象を補って訳すこと。【5点】

「該当傍線部」 A2 おのおの衣きぬ脱ぎてかづけければ、B2 二間ばかりに積みあまりにけりC1 となん

「模範解答」 A2 それぞれ衣を脱いで白女に与えたので、B2 衣が二間ほどに積んでも余るほどになってしまったC1 ということである。

「ポイント」

A【2点】おのおの衣脱ぎてかづけければ、↓ それぞれ衣を脱いで白女に与えたので、

※①「それぞれ衣を脱いで与えたので」ができていたら【1点】。

※「それぞれ」は「おのおの・各々・各自」などでもよい。

※「与えた」は「遣った」でもよい。「かぶせた」では×。

※「ので」は「から・ため」でもよい。これら以外は×。

※①の訳ができている上で「白女に」もあれば【2点】。

※「白女に」は「玉淵の娘に」でもよい。

※ここに敬語はない。余計な敬語の訳がある場合は、A全体から1点マイナスする。

B【2点】二間ばかりに積みあまりにけり ↓ 衣が二間ほどに積んでも余るほどになってしまった

※②「二間に積まれた(積み上げられた・積み重ねられた)」ができていたら【1点】。

※「二間」は「二部屋」でもよい。

※「ほど」はなくてもよいとする。

※②の訳ができている上で「余る」の意もあれば【2点】。

C【1点】となん ↓ ということである。

※「という」でもよい。伝聞の意があればよい。

問三 ① Aの歌には「物名(隠し題)」という修辞が使われています。どのように使われているか説明しなさい。【4点】

「該当和歌」 ふかみどりかひある春にあひぬれば霞ならねど立ちのぼるかな

「模範解答」 A1「深緑甲斐ある」の意であるB3「ふかみどりかひある」の箇所のでりかひに「どりかひ」という題が隠されている。

「ポイント」

A【1点】「深緑甲斐ある」の意である

※Bが0点の場合は得点できない。(ただし、誤字等で0点となっている場合は除く)

※「どりかひ」を含んでいる箇所が本来は「深緑甲斐ある」の意であることが分かる説明があればよい。

B【3点】「ふかみどりかひある」の箇所の「どりかひ」に「どりかひ」という題が隠されている。

※「ふかみどりかひある」に「どりかひ」があるという説明があれば【2点】。

※右の説明がある上で、それが「どりかひ」の箇所であると明らかにしていれば【3点】。

『どりかひ』は『あさみどり』の『どり』と『かひある』の『かひ』のよきな説明でよい。

問三 ② Aの歌を何が「立ちのぼる」のかを明らかにしながら現代語訳しなさい。【6点】

「該当和歌」 A1ふかみどりB1かひある春にあひぬればC1霞ならねどD3立ちのぼるかな

「模範解答」 A1草木の緑も深まる中、B1生きる甲斐のある春に巡り会いましたので、

C1立ち上る春霞ではありませんが、D3私も霞のように帝のおそばに上らせていただきましたよ。

「ポイント」

A【1点】ふかみどり ↓ 草木の緑も深まる中、

※「ふかみどり（深緑）」が「草木・木々」のこととわかれればよい。

または、「深緑の春・深緑映える春・緑の豊かな春」のように、「春」に係る説明となっていればよい。

※「中」はなくてもよい。

B【1点】かひある春にあひぬれば ↓ 生きる甲斐のある春に巡り会いましたので、

※「生きる」は「出逢う・感じる・体験する」などの意ととれる表現であればよしとする。

※「巡り会い」は解答例では「会」の字が使われているが、一般的には「合」の字であるので、「合・会・逢・遭」など、いずれでもよしとする。

※「巡り合うことができた」でもよし。

※「まし」（丁寧）はなくてもよし。

※「ぬれ」の完了の意味「しした」がない場合は×。

※「は」の確定条件（原因・理由）の意味「しので・しから・しため」がない場合は×。

C【1点】霞ならねど ↓ 立ち上る春霞ではありませんが、

※「霞ではないけれど」の意があればよい。

※「春霞」は「霞」でもよし。

※「ありません」（丁寧）は「なごよし」でもよし。

※「立ち上る」はなくてもよし。

D【3点】立ちのぼるかな ↓ 私も霞のように帝のおそばに上らせていただきましたよ。

※①「私は帝のそばに上った」の意があれば【2点】。

※②「私は」が間違っている、もしくはない「帝のそばに上った」は【1点】。

※「帝のそばに上った」の意がない場合は×。

※「霞のように」や、敬語表現「お」「～させていただく」「ます」はなくてもよい。

※①もしくは②の状態である上に、詠嘆（～なあ～よ等）の訳があれば【プラス 1点】。

問四 Bの歌に込められた心情を説明しなさい。 【7点】

「該当和歌」 命だに心に叶ふものならば何か別れのかなしからまし

「模範解答」 A3自分の命が思いのままになり、源実の帰京の折まで元気でいられるという保証があるのなら別れも悲しくはないが、B2命ははかなく、無事でいられるという保証はないので、C1これが終の別れになるのではないかと思われてD1悲しい。

「ポイント」

A【3点】自分の命が思いのままになり、源実の帰京の折まで元気でいられるという保証があるのなら別れも悲しくはないが、

※「命が思いのままになるなら別れは悲しくない」の意があれば【2点】。

※右の意がある上で、「源実の帰京まで元気でいられるなら別れは悲しくない」、もしくは「ずっと元気でいられるなら別れは悲しくない」に相当する意があれば【3点】。

B【2点】命ははかなく、無事でいられるという保証はないので、

※「命ははかないので・人生は無常なものなので」のように一般的な無常を原因とする説明か、「無事でいられる」という保証はないので・源実の帰京まで生きていられるか分からないので」のように自分がいつどうなるか分からないことを原因とする説明の、いずれかがあればよい。

※右の意がなく、「命は思うままにはならないので」の意がある場合は【1点】。

C【1点】これが終の別れになるのではないかと思われて

※「終の（永遠の・今生の・一生の・最後の）別れと思われて・二度と（もう・今後）会えないのではないかと思われて」の意があればよい。

D【1点】悲しい。

※「悲しい（つらい）」という結論があればよい。

問五 波線部において作者が言おうとしていることを、本文全体の内容をふまえてわかりやすく説明しなさい。 【7点】

「該当波線部」 さて、もとよりさるべきはことわりなり、すべて及ばぬほどの身なれども、芸能につけて望みをとげ、賞をかうぶる者、古今数を知らず多し。

「模範解答」 A 1身分のある人は当然だが、B 1遊女や芸人、または舍人といったC 1非常に身分が低い者であっても、D 1歌道において自分の望みを達成し、E 1高貴な人から賞讃され、F 1勅撰和歌集に歌が入集したり、撰者になったりするような者は、G 1今も昔も大勢いる、ということ。

「ポイント」

※まずは、CとD、CとE、CとFの組合せのいずれか（もしくは複数）「これを①とします」ができていることを確認して下さい。

これらの組合せで2点から4点が確定します。
その上で、A・B・Gができていれば、各1点が足されることとなります。

A【1点】身分のある人は当然だが、

※①「CとD、CとE、CとFの組合せ」の合計が0点の場合は得点できない。（ただし、誤字等で0点となっている場合は除く）

※「身分のある人」は「高貴な人」などでもよい。

※「当然」は「もちろん」などでもよい。

B【1点】遊女や芸人、または舍人といった

※①「CとD、CとE、CとFの組合せ」の合計が0点の場合は得点できない。（ただし、誤字等で0点となっている場合は除く）

※「遊女・芸人・舍人」のうち一つでも例として上がっていれば、または、それらがなくとも「白女（玉淵の娘）」が例として上がっていれば、よしとする。

C【1点】非常に身分が低い者であっても、

※D・E・Fのいずれもが0点の場合は得点できない。（ただし、誤字等で0点となっている場合は除く）

※「身分が低くても」の意があればよい。「非常に」はなくてもよい。

D【1点】歌道において自分の望みを達成し、（〜ている人はいる）

※Cが×の場合は得点できない。（ただし、誤字等で0点となっている場合は除く）

※「歌道」は「芸能・芸」でもよしとする。また、「和歌に熱心であること」で・和歌を上手に詠むこと」など、和歌に専心する内容でもよしとする。

※「自分の望みを達成し」は「望みを叶え・大成し」などでもよい。

E【1点】高貴な人から賞讃され、（〜ている人はいる）

※ Cが×の場合は得点できない。(ただし、誤字等で0点となっている場合は除く)

※ 「高貴な人から」はなくてもよい。

※ 「賞讃され」は「褒美をもらい・賞を受け」などでもよい。

F【1点】 勅撰和歌集に歌が入集したり、撰者になったりするような者は、()いる

※ Cが×の場合は得点できない。(ただし、誤字等で0点となっている場合は除く)

※ 「和歌集に入集する」の意があればよい。「勅撰」はなくてもよい。これがない場合は×。

※ 「撰者になる」の有無は不問。

G【1点】 今も昔も大勢いる、ということ。

※ ①「CとD、CとE、CとFの組合せ」の合計が0点の場合は得点できない。(ただし、誤字等で0点となっている場合は除く)

※ 「大勢いる」の意があればよい。「今も昔も」の有無は不問。

※ 「大勢」は「たんさん」などでもよい。

四 漢文(35点)

問一 5点

(模範解答例)

A○ 2点
ないと

B○ 1点
言い切る

C○ 2点
ことはできない。

各加点要素の加点の条件

【A・Bに関して部分採点を行う】

Aの要素 2点 「無有」の訳
※「ない(無い)」「いない」「あり得ない」も可とする。「存在しない」の意なら可。

Bの要素 1点 「為」の訳
※「〜と言いつ切る」「〜と言う」「〜とする」「〜と思う」「〜と断定する」「〜と確定する」の意にとれる表現であれば可。

Cの要素 2点 「不得」の訳
※不可能の意で、「〜(〜)とは(〜)できない」「〜れない」「〜られない」「〜きれない」の意なら可。

※「〜わけにはいかない」も可。
※「ない(いない)とは言えない」という解答でも、A・B・C○(満点)。

問二 6点

(模範解答例)

たれかなるべからざらん。

※「たれか」を、「だれか」としているものは3点減点。

※「べからざらん」を「べからざらむ」としているものは可。

*その他は解答例のみ○。

問三 5点

(模範解答例)

見ニ不善人ニ、且レ恥ニ与レ之接一矣。

*解答例のみ正解。

*返り点が合っていれば「一」は不問。

問四 10点

(模範解答例)

A ○3点

神仙のほうが、

B ○2点

自分と同じように

C ○1点

神仙になることのできる

D ○1点

一流の人物を

E ○1点

探し求め、

F ○1点

その人に災いを避けさせたり、幸福や長寿や健康を授けるために

G ○1点

人間界に現れたのだということ。

各加点要素の加点の条件

【A・B・C・D・E・F・Gに関して部分採点を行う】

Aの要素「彼」の指示内容 3点

※「彼」⇨「神仙」であることが表現できていれば可。

Bの要素「類」の内容(1) 2点

※「(自分と) 同じような者」「同類」の意の表現があれば可。

※「仲間」「仲間となれる者」の意の表現も可とする。

※「友人」「類」はB×(B=0点)。

Cの要素「類」の内容(2) 1点

※「神仙になることができる者」「神仙になる素質を持つ者」の意の表現があれば可。

Dの要素「類」の内容(3) 1点

※「すぐれた人」「一流の人」の意の表現があれば可。

Eの要素「求」の訳 1点

※「探し求める」「求める」「会う」の意の表現があれば可。

※「類を以て」の「を以て」を「くによって」の意に解し、「自分と同類であることによつて(神仙になることのできる、一流の人物を) 探し当て「||く近づき」という意の表現をしていても可。

Fの要素 神仙がこの世に現れる目的 1点

※「(神仙になれる立派な人物を) 不幸や病氣から避けさせる」など、相手をよくないことから遠ざけるといふ意の表現、または「(神仙になれる立派な人物を) 幸福や長寿にする」など、相手をよいことに近づけさせる意の表現のどちらか(あるいは両方)があれば可。

Hの要素 1点

※「(神仙が人間界に) 現れた」「(一流の人物と) 出会った」「(一流の人物に) 会いに来た」意の表現があれば可。

※この要素を書く場所は、末尾でなくてもかまわない。たとえば「神仙が人間界に現れるのは」というような表現でも可。

問五 9点

(模範解答例)

A ○1点

神仙ももともとは人間であり、

B ○1点

誰にでもなることができることに気づかず、

C ○2点

自分で神仙になる努力をしないで、

D ○3点

ひたすら神仙に出会って

E ○2点

不死の術を学ぼうとしている人。

各加点要素の加点の条件

【A・B・C・D・Eに関して部分採点を行う】

Aの要素 1点

※「神仙ももとは人間である⇨神仙は人間がなったものである」ことに気づかない(⇨ことを理解しない)ことに触れていれよ。

Bの要素 1点

※「誰でも神仙になることができる」ことに気づかない(⇨ことを理解しない)ことに触れていれよ。

※「自分も神仙になることができることに気づかない(⇨ことを理解しない)」という内容でも可。

Cの要素 2点

※「自分で(神仙になる)努力をしない」「他人に頼らず、自力で(神仙になろうと)

しない」「ことに触れていけばよい。

Dの要素 3点

※「神仙に出会い、(＝神仙から)学ぼう(＝教えてもらおう)とする」ことに触れていけばよい。

※「神仙にならずに、(不老)不死の術(だけ)を教えてもらおうとする」という読み違いをしている場合は、D全体×(D＝0点)。

Eの要素 2点

※神仙から何を学ぼうとしているのかを明らかにする。「不死の術(不死になる方法)」「不老不死の術」「神仙になる方法」の意味であればよい。

※「神仙に出会い、自分を神仙にしてもらおうとする」という内容でも、D・Eは満点。